開放的・閉鎖的

上野直蔵

最近、教員免許の問題について、開放的と閉鎖的という二つの言葉がよく使用されている。現在、各大学において所定の教科目の単位数を履修したものには、中学・高等学校の教員免状が附与される。これは開放的な制度と呼ばれてよい。ところで、最近の中教審の答申中に一つの注目すべき立案が見出される。それは、一般大学において一定の教科を履修したものにも、卒業後さらに教育大学のごときところで一年の勉学を続けさせようというのである。いわば、もとの高等師範学校が復活され、そこが教員志望者の唯一の通路となるわけである。これは明らかに閉鎖的な制度だと言われねばならない。いな、それはさらに封建的な制度としてきびしく斥けられねばならない。なぜなら現在一般大学の享受しつつある正当な権利が不当に剝奪され、いままで広く開放されていた教員への通路に一つの特権的なカーテンがおろされようとしているのだからである。もとよりわれわれは手をこまぬいてそれを黙視しているわけではない。われわれは機会あるごとにそれに対する強い反対の叫びをあげており、その結果中教審のかの立案はどうやら流産の憂き目を見そうな状況にある。それはじつは当然のことと言われてよい。なぜならかの案は一般に閉鎖的から開放的への方向をとると考えられる歴史の発展法則にさからうものであり、その意味でいわゆる後ろ向きの案だからである。民主々義の基盤に立つわが国の教育制度がそうした古くさい封建的な計画を許容するはずがない。

しかし、今日は一つ、あまり固くるしい議論にわたることは差しひかえて、開放的と閉鎖的とに関連して、気楽な気持で二、三の私見を述べることとしょう。

たとえば、バスと電車とをくらべるとき、前者は開放的、後者は閉鎖的と言えないだろうか。第一、電車はレールそのものが大地に固定しており、そして車体は、脱線の場合は別として、断じてこのレールから離れることはできない。それに反してバスには固定したレールといったものがない。だから運行が比較的自由である。のみならず車体の与える印象そのものが同じではない。電車の方はガッチリと固い感じがするに反し、バスの方はどこか軽快であって柔かい感じがする。わたしがバスを開、電車を閉とみなす所以である。もっとも、これはあるいはわたし一人の主観的

な見解であるかも知れない。

それでは洋服と和服とはどうであろうか。明らかに前者は閉鎖的、後者は開放的ではないであろうか。和服のなかでも特に開放的なのはユカタ、丹前のたぐいではあるまいか。だからわれわれは湯上がりのノビノビした開放的な気分とキッチリと身体に合った閉鎖的な洋服とを不調和と感じるのである。もしどこかの温泉旅館でユカタや丹前の代わりに貸洋服といったものを用意していたとすれば、おそらくそこでの夕食はあまりうまくはないに相違ない。

しかしより以上にハッキリと閉と開との対立を示すものは洋館と日本家屋とではなかろうか。一室々々に頑丈なドアがあってガッチリと錠のかかる洋室。それに対して、障子か何かで仕切られて、ごく手軽に開閉のできる和室。だから日本の旅館などでは、団体の宴会であると、いくつもの部屋のフスマを取りはずして、直ちに一つの大広間を現出することができる。洋風の建築ではそうした器用な真似はできない。

ふくみ笑いというのがある。閉鎖的な笑いである。それに対して呵々大笑。いうまでもなく開放的な笑いである。前者は一定の限界に制限されたつつしみ深い笑いであるに反し、後者はいわば一切の限界を超越した「手放し」の笑いである。しのび泣きと号泣との間にもそれと同じ関係があるであろう。そこから連想されるのは、一般に音にも閉と開との差別があるという真理である。わたしはいまこの真理をふかく究明するいとまをもたないが、ただ一例だけあげるならば、わたしは陰にこもった釣鐘の音に閉ざされたものを感じ、陽気に鳴りわたる教会堂の鐘の音に開かれたものを感ずる。そういえば、相国寺の鐘は gone, gone と鳴り、彰栄館の鐘は can, can と鳴ると言った同志社人は誰であっただろうか。

ここですこし視野をかえて、道徳における閉と開とを考えてみよう。親に対する孝を最も基本的と考える家族的道徳は閉鎖的、それに反して無制限の人類愛を説くキリスト教的道徳は開放的といえないであろうか。そしてこの二つはつねに密接に結合してわれわれの行動を律すべきではなかろうか。なぜなら隣人に対する愛を全く没却した狭い家族的道徳は一種のエゴイズムに外ならないと同様、自分の家族や身内に対するあたたかい肉親的関心を抜きにした人類愛といったものは全く内容のないユートピア思想にすぎないからである。親が子を愛し、子が親をしたうのは一切の生物に通ずる自然の性情である。この性情を無視することは許されない。家族的道徳はそうした自然の性情に立脚するものとしてゆるがしえない強みをもつ、しかしそこに留まってそれから一歩も外に出ないような閉鎖的な心情は理性的人間にふさわしくはないであろう。人間はどこまでも家族を中心とすると同時にさらに広々とした社会的地平を展望しえなければならない。全人類がいわば一つの運命を共有するものだという普遍的な連帯意識に目ざめるのでなければならない。いわゆる開放的道徳はそこに成立するのである。

しかし開放的道徳というのは一つの理念であって現実の事態ではない。このことを特に痛感させるものは、たとえば、西ベルリ

ンと東ベルリンとを二つに分かつするあの厚い壁である。あるいは朝鮮の三十八度線であり、中国大陸と台湾とを隔てる深い海である。そういえば、鉄のカーテンとか竹のカーテンとかいった言葉もある。なぜに人間はこの狭い地球面をなおその上それほどにまで細分せずにいられないのであろうか。

古き時代の人々はいわば自然的国境ともいうべきものによって互いに孤立した生活を送らねばならなかった。彼らは峻険な山脈に否応なしに小さい閉鎖的社会にまで細分されねばならなかった。しかし科学と技術との驚くべき進歩発展はそうした自然的国境をことごとく粉砕した。現代の人間にとってはもはやいかなる高峰も、またいかなる深海も越えがたき障碍であることはできない。その意味でいまや「世界は一つ」となったのである。われわれ東洋人にとって西洋はもはや遠い海、波岸の国ではない。航空機はほんのひと眠りの間にわれわれをパリにでもロンドンにでも運んでくれるのである。そのかぎり現代の人間にはもはや自然的距離なるものは存しないと言われてよい。

だが、それにも拘らず、たとえば西ベルリンの市民は、ほんの一マイルの近距離に住む兄弟や親戚と会うことも語ることもできないのである。なぜなら「そこに壁がある」からである。何というこれは不自然な現実であることか。昔の人々にとっては一つの夢の国であった北極や南極をさえわがものとなしえた人間、いな、ウサギの住むという月の世界への旅行でさえ今や夢物語りでなくなった現代の人間が、わずかに一マイルの近隣に住む知友とさえ自由に交通することができないというのである。何ということか。

しかし老子の教えをまつまでもなく、不自然なものは到底永続的であることをえない。一つの都市を二つに分かつする人為的な障壁は必ずやいつかは撤去されるに相違ないであろう。この「いつか」が果たして現実にいつであるかをわたしは予想することができない。しかし昨年の十二月から今年の一月にかけて、たとえ一時的にもせよ、かの障壁が開放され、何十万人かの西ベルリン市民が東ベルリンの土を踏むことを許されたという一事は、将来いつかベルリンが一つの都市となるという希望をわれわれに与えるものではないであろうか。なぜなら彼らの英知をもって一切の自然的障碍を克服した人間が、同じく彼らの英知をもって、区々たるイデオロギーの対立や、編狭な政治上の閉鎖性などを克服しえないはずはないだろうからである。だがこれはあるいはあまりに甘い、あまりに楽観的にすぎる一つの夢想にすぎないであろうか。

ここでわたしは新島襄先生をおもう。先生の時代の日本は「鎖国日本」であった。それはたんに外から来るものを頑強に拒もうとしただけではない。さらに内から外に出ようとする者をもきびしく引きとめようとしたのである。すなわち、それは典型的な閉鎖的社会であった。サザエのように固いカラの中に閉じこもり、厚い蓋をもって外の世界から自己を隔離しようと努めつつある社会であった。しかし歴史の進展は日本がながくそうした鎖国状態にとどまることを許さなかった。サザエのカラは内外両面から打ち破られねばならなかった。一方外から日本の門戸をたたいてその

開放を強制するものがあった。いわゆる黒船がそれである。しかし同時に内から鎖国の壁を突き破って広やかな「世界」へと解放されんことを望むものがあった。それは若々しいエネルギーに燃える新進気鋭の青年たちであった。封建的な古いワクを窒息的なものと感じ、それから脱出することに自己の生命をすら賭けようとした新生日本の担い手たちであった。吉田松陰はそのうちの一人であった。閉鎖的なものから開放的なものへ、こうした歴史の発展法則そのものが彼らの情熱をかき立てたのであった。もちろん彼らは必ずしもそうした法則を十分に意識してはいなかったであろう。しかし彼らは時流の先端を行くものとして、本能的、直覚的にそうした歴史の動向を感じとったのであった。かくて彼らは、ちょうど生まれ出ようとするヒナが卵のカラを内からつき破るように、鎖国日本のカラを内からつき破ろうとしたのであった。だが松陰はいたましくもこの試みにおいて挫折した。それに反して新島先生は、一つは神的な恩籠の恵みもあって、旧日本の一角をつつき破るという命がけの試みに成功されたのであった。一八六四年六月一四日、先生が幕府の禁令を犯し函館から脱出されたとき、閉鎖的から開放的へと運命づけられた維新の歴史は明らかに一つの新らしい頁を書き加えられたのであった。

そして先生がアメリカで学びとられたものは何であったか。それは無限に開放的なキリスト教精神であった。それは当時の日本人にとってはたしかに全く未知の精神であった。当時の日本人はなお封建的・閉鎖的な考え方に束縛されていた。そこでは藩主に対する絶対の忠誠とか、両親に対する絶対の従順とかいったものが最高の道徳と考えられていた。それは要するに拡大された家族的道徳であった。藩は一つの大きい家族であり、藩主は絶対権を有する家長であり、そして士農工商といった身分的なワクに固定された藩の成員全体はこの家長のもとに一糸乱れざる結束を保つべきであった。新島先生はこうした社会に生まれ、こうした社会に育たれたのであった。しかしアメリカにおいて先生の学ばれたのはそうした封建的なワクを超越した全人類的な精神であった。無限に開放的なキリスト教精神であった。ここにはもはや家と家との対立はない。藩と藩、国と国との対立もない。そうした一切の閉鎖的境界を超越し、また一切の身分的・階級的拘束を打ち破って、地球上の全人類を自由にして平等な同胞と観ずる無限に開放的な精神――新島先生がアメリカにおいてふかく体得され、そして後に同志社立学の礎石とされたのは、まさにそうした精神なのであった。

もとよりそれは一つの崇高な理念であって直ちに現実の事態ではありえないであろう。はじめてイエスによって説かれた隣人愛の教えは二千年に近い歳月を経ていまだに全人類を一つに融和せしめることに成功してはいないからである。しかしそれ故にとてわれわれはかの理念を軽視すべきではないであろう。むしろ新島先生の子弟たるわれわれはつねにこの理念を唯一の拠りどころとして、閉鎖的から開放的へという歴史の法則を一歩々々実現することに努めねばならないであろう。

（大学長）

同志社と立志社

高橋信司

新島襄と板垣退助

同志社のキリスト教と立志社の自由民権とは共に文明開化の推進力でありながら、しかもキリスト教も自由民権も共に、当時天皇制の確立を急ぎつつあった明治政権にとっては、それが依拠する国体観に対する批判者として容認しがたいものであった。キリスト教における神の前には万人は平等であるとの教説は、平等主義の見地において民権自由を主張する在野政客の運動を思想的に基礎づけるものだったからである。だから、当時におけるキリスト教徒と民権論者の接近は必然不可避の趨勢であったといわねばならないが、新島襄と板垣退助の交友関係とてもその例外をなすものではない。

渡辺実氏の『新島襄』によれば、新島と板垣とは「明治八年二月の大阪会議以降、とくに懇意」となり「思いきって言論・思想の交換が出来る関係」にあり、新島は「板垣の賛助によって多くの高知伝道の便宜を得た」ということである。大阪会議といえば、板垣を中心とする立志社創立の翌年のことであり、新島の同志社設立九ヵ月前のことであるから、両者の交際は同志社創立以前から始められていたものと見られるが、手許の資料ではその後の交渉関係を詳にすることができない。しかし大塚前総長から恵与された岩波文庫の『新島襄書簡集』は、新島が、明治十五年四月の岐阜における板垣「遭難に深く同情して、一度見舞ったことがある」として、十六年十二月卅一日付けの板垣あて書簡を収録しているから、二人の交際は相変らず継続されていたものということが可能である。（ただし、その書簡は実際には送達されなかったといわれている。）

問題の書簡はキリスト教を「文化の源泉」とする新島が、キリスト教による「新心」を得て「新民」となることを主張し、「閣下にして、わが東洋改良を以て、自任せらるるならば、先づ第一に閣下の御心を新たにするこそ急務たり」と論じ、「閣下にして、自ら新心を得、新民とならるるならば、実に閣下の大幸、邦家の福祉と存じ候」というものである。ところで、川田瑞穂の『片岡健吉先生伝』には「元来板垣も基督教を信仰し、十四年九月東上の際、伴い来れるその女を神戸の基督教女学校に入学せしめ、後には長男鉾太郎を牧師としたほどである」と録されているから、前記の新島書簡は板垣に対する入信勧請というよりも、キリスト教の立場から板垣の運動を激励したものと見ることができよう。

前記の新島書簡はさらに追記して、「兼々小生の企て候大学も、中々果敢取申さず候処、近来西京にも逐々賛成家相見へ申候間、御喜び下さるべく候。何卒、閣下にも御賛成下され、国会開設前に、是非とも設置仕り度候」と述べている。だから、新島はこのころすでに国会開設前の大学開設運動を展開し、板垣にも協力を要請していたことは明らかであるが、それはまた両者交際の密度を示す一面ともいうことが可能である。

西原清東と片岡健吉

同志社と立志社をつなぐ代表的人物といえば板垣と共に民権運動の指導的地位に立ち、後年同志社に入って第五代社長となった片岡健吉であるが、彼と共に忘れられないのが、その前任者の西原清東である。西原は明治十年立志学舎に入って板垣の感化を受け、法律の研究を志したというから、坂本南海男が英文原書でスペンサーの『社会平権論』を講じていたころの立志社人である。のち上京して代言人試験に合格し、高知に帰って開業、自由党青年闘士として活躍、やがてキリスト教の洗礼をうけ、二十四年大阪に開業のかたわら教界のために奉仕し、同志社の改革問題に参加して大いに尽すところがあったというから、彼の第四代社長就任の由縁はここに求められよう。彼の社長在任は明治三十二年七月から同三十五年三月までのことで、しかも彼は社長就任前年の総選挙で代議士に当選して任期満了までその職にあったから、代議士在任のまま同志社社長をつとめていたこととなる。その社長離任は外遊のためであったが、時に第五代の社長として入社したのが片岡健吉であった。

西原の社長就任はデヴィスの懇請によるものとのことであるが、片岡が西原の附託を受け、デヴィス、宮川経輝の了解の上で社長就任を受諾したのは三十五年三月のことであり、その就任式は同年六月であった。しかし、片岡社長の登場は意想外のことではなかった。片岡は明治四年外遊中ロンドンで馬場辰猪のすすめで教会に出入りし、立志社を主体とする民権運動の渦中にあって明治十年の立志社の獄に連坐し、獄中でバイブルを愛読し、出獄後土佐に伝道したアッキンソンの感化を受け、すでに十八年五月にはナックスから受洗して高知教会を設立したほどの信徒であった。しかも、これより三年には初めてデヴィスを知り、十七年二月初めて同志社に新島を訪れ、自来しばしば同志社を参観してデヴィスとも会見し、二十五年十一月には坂本南海男と共にデヴィス宅の客となったこともあり、社長就任の前年十月には日本基督教会伝道局総裁の重職に

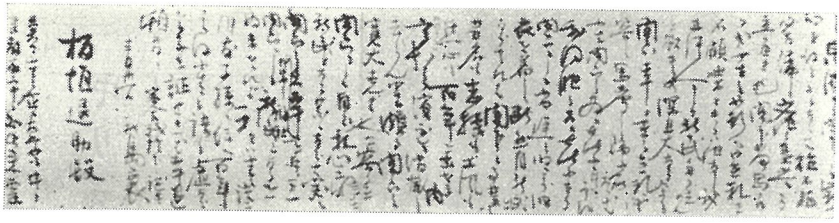
あげられている。だから、当時の同志社にとっては片岡社長の登場は奇想天外というほどのことではなかった。

同志社社長就任当時の片岡は、民権運動時代からの代議士としてすでに衆議院議長の要職にあった。彼が初めて議長に選ばれたのは明治三十一年、第三次伊藤内閣下の第十二議会のときのことで、自来六年間、第一次桂内閣下の第十八議会に至るまで四度連続議長の椅子を占めていた。だから、社長就任以来の彼には東京・京都間の往復に席のあたたまる暇はなかったが、大塚素の内助よろしきを得てその職責を全うしたと伝えられる。その社長生活は、森下菅根の訳したデヴィス手記に、「同志社の簡素な社長室に隣って作られた二室があった。氏は其所で眠り、また食事せられて、時たま、私の招待に応ぜられた。氏は学校に居らるることを欲せられ、教授および学生は、自由に面接が出来た。その力強い感化は、最初より校内に感応せられた」（土佐史談・六十三号）とあるように、謹厳なうちにも感化力に満ちた奉仕の生活であったといえるが、前記の川田『片岡伝』に、三十六年三月一日の総選挙を終って九日入洛した片岡が、三月までの俸給九百円を受領、直ちに八百円を同志社に寄付したと録する一事に徴しても、彼が如何に同志社につくしていたかがうかがえる。

西原、片岡共に立志社人として民権運動に投じ、自由民権からキリスト教に入信し、キリスト教徒の故をもって同志社に招かれて社長の地位におかれた同志社人である。自由民権はキリスト教と共に、平等主義の見地において共通するものをもっていたから、キリスト教の立場から万人平等の信仰を政治的に実現しようとして民権運動に積極的に参加して行った信徒の出た反面、自由平等の主張においてその思想的基礎づけをキリスト教に求めて入信する人々のあったことは、まことに自然の成り行きであったといえる。だから、西原・片岡の入信は不思議でも何でもないが、生涯官途につくことを拒否しつづけた新島の同志社において、代議士として懲罰委員長の座についた西原や、同じく衆議院議長の栄職にある片岡を社長に迎えねばならなかった一事については奇々怪々の感なきを得ないが、時代が日清戦後の国家主義全盛期に相当する点から見て、同志社受難史の一面と解するの外はなかろう。

植木枝盛と同志社

新島が「板垣の賛助によって多くの高知伝道の便宜を得た」ことはすでに述べたところであるが、ここに忘れられてならないことは、高知におけるキリスト教伝道の場が主として立志社であったことである。恐らく平等主義の点において一致するものを有するためでもあろうが、兎に角、そこには同志社と立志社との因縁の浅からざるものを見出さずにいられない。もっとも立志社で初めてキリスト教の講演を試みたものはギリシヤ教の司教沢辺琢磨で、それは明治八年のことであるから、最初からプロテスタンティズムの影響があったということはできないが、十一年四月のアッキンソンの講演は特筆大書されねばなるまい。四月二日付の植木枝盛の日記には、「亜米利加人アッキンソンの望により立志社に於て臨時演説会を開く。午後七時始む。聴客山の如し、本日アッキンソンを尋ね往く」とあり、四日の条には「夜アッキンソンの望により臨時演説会、聴



衆如山」と録し、六日、八日、十日、十三日、十五日にも同様の記事が見られるからである。「聴衆如山」とは外人演説に対する好奇心の現れと見られないこともないが、立志社におけるキリスト教講演が盛況裏に幾日もつづけられたことだけはたしかである。

この日記の主・植木枝盛は自由民権運動のすぐれた理論的指導者であった。その思想は天賦人権説から出発した人民主権主義で、明治八年の国会開設建白における士族民権説を止揚して、民権自由の要求を、明治十年の立志社建白に見られるような大衆のものへと発展せしめた者は外ならぬ植木枝盛その人であった。このことは十一年七月の府県会規則における制限選挙制を非民主的として普通選挙を主張し、翌年発足の高知県会の開設頭初、片岡議長ら立志社系議員と共にその改正建議の成立を強行した一事に徴しても明白である。だから、植木は徹底した民主主義者であって、そのキリスト教への接近もこの見地からなされたもので、彼は入信はしかったがキリスト教には異常な関心をもっていたからこそ、前記のようにアッキンソンの高知伝道を詳細に記録したものといえる。

植木日記によると、彼が初めて教会を訪れたのは上京中の明治八年六月六日のことで、この日のことを「朝九時より入船町耶蘇教講経を為聴行」と記し、十月八日には「午後米国耶蘇教師を訪ふ」と録し、九年二月一日には「山川耶蘇講経処に行」ったのを始めとして、しばしば教会や聖書講議を聴きに出かけたことを記し、十年一月四日には「ホルベッキ氏の演説を聞く」とか同二十一日には「朝ニコライ礼拝堂に往く。午後日本基督教会に過る」としたため、十四年八月五日の条には立志社でキリスト教の講義を聞いたことを明らかにしている。

植木はこのようにキリスト教に対する良き理解者であった。だから、彼の同志社に対する接近もまた極めて自然の成り行きといえるが、その日記には明治十一年九月二十六日の条に「午後同志社に往き而して新島襄を訪う」とある。しかも、彼の同志社訪問はさらに十年後に再現し、その二十一年十一月十六日の条には「朝徳富猪一郎、金森通倫来訪。共に丸山弥阿弥にて食事し、午後一時同志社に抵り、女学校、本校、予備校、看護婦学校、病院、図書館などを巡覧」と記し、さらに「午後四時より新島襄氏、私立大学校設立のことに付同社諸学校生徒総員を会堂に集め、氏および金森通倫氏の演説あり。吾亦新島、金森二氏の求めにより生徒総体に対して一場の演説を為す」との記録を見る。「同志社大学設立の旨趣」が公表されたのが同月十日であるから、この植木演説はその六日後のことに当るが、牧野元総長も当時学生として聴取された由を先年ご来高のとき承ったことがある。

（校友・高知短期大学教授・法学博士）

キリスト教的人間観

柳島彦作

私はトインビー教授著の「アメリカと世界革命」の内容についてのお話をしたいと思います。この書物につきましては、かならずしも好評ばかりを得たとは申されません。しかし私にとりましてこの書物は非常に面白くかつ示唆に富んだものでありました。

トインビー氏はこの書物において、アメリカの世界平和に対する責任はすこぶる重大であると説き、しかも、その理由は世界史上において進歩の名に価する革命の指導原理となったものは実にアメリカ独立戦争を指導した原理であると断じ、あの有名なエマスン Ralph Waldo Emerson 1803～82 のコンコード・ヒム Concord Hymn の中の第一節を引用して、この点を面白く説明しています。そして、アメリカの独立戦争の指導原理がなぜその後におけるいろいろの革命の原動力となったかについて、トインビー氏はこの指導原理が究極的な意味において基本的人権をかちとるための一種の革命であったからであると主張するのであります。これをもっとしぼって申しますと、トインビー氏は米国の独立をいつの世にでも苦しんでいる「貧乏な大衆」に人としての価値をとりもどさせようとする闘争であると解釈しているのであります。さらにまた彼は「現在においても人間の四分の三は貧困に苦しみぬいている。しかも米国の巨大なる富はこの人達の運命とは殆んど関係がない。米国独立戦争の指導原理は、その後の諸革命において苦しんでいる大衆解放に役立ってきたのであるが、一九一八年第一次世界戦争が終るころから米国は苦しんでいる大衆側を去って世界のマイノリティーである富者の富を守るという側に立つようになって、遂に世界の革命を指導してきたという立場を放棄した」と論じています。しかし、これは米国に

とっては残念なことであり、むしろ一つの誤りであるとさえ考えられます。さらにトインビー氏は十九世紀における英国と今日の米国が依ってもって立とうとしている政策は非常に類似するところがあるのであるが、この二つの国の帝国主義的な傾向の中には根本的に異なる点があるとして、前者はただ搾取のみがその目標であったのに対し、米国の場合は「与える」という面が明確に出ている。たとえばマーシャル・プランなどはその一面の現われであると説く。マーシャル・プランについてはもちろん是非の論は盛んでありますが、これが米国の帝国主義的政策の「与える」一面を現わしている事実は否めないと思います。

私はここでトインビー氏の著書を紹介しようとは思っていませんが、今一つの点を書き添えておきます、それはケネディー前大統領が平和部隊を低開発地域へ派遣する目的で組織、訓練したということです。トインビー氏はこれについて「地の塩運動」といってもよかろうといってます。この部隊員は派遣地域の大衆と全く同じ生活水準の生活をし、その幸福増進のためにしっかりした具体的な貢献をする原動力として働くことになっています。つまり派遣地において「地の塩的」な役割を果すということになります。こういう運動が成功することは実に困難ではありますが、しかし米国が本腰を入れて領土的野心や自国の権益拡張というようなこととは全然別個の運動として、誠実かつ強力にこの種の運動を支持するときに、米国は新しい角度から世界革命の先頭に立ってその荷い手となることができるのである。米国が自己の巨大なる物質的な進展をのみ誇りとすることに終始するか、今一度人間解放の荷い手となって世界革命をリードするかは一にかかって米国自身の責任である――とトインビー氏は断じています。

トインビー氏でなくてもデモクラシィの根幹が基本的人権を重んじることであり、またその思想の基盤にはキリスト教的人間観が在ることは何人といえども否定することができないことだと思います。私はトインビー教授のいわんとするところは「米国はキリスト教的生命に充ちあふれた、責任のある実践によって世界的人間解放運動―すなわち世界革命の先頭に立つべきだ」ということであると信じます。

私は幸いにして同志社普通学校から大学にいたるまで同志社に学び、さらに同志社中学、高商、経専、高校、大学とずっと同志社人として母校同志社の教職についてきたおかげで同志社人としての誇りが身についてまいりました。目下同志社とは関係の深い豊中市の梅花学園におりますが、私は私なりにできるだけの勉強をし、充実した講義をしております。なまけ心が出てきても「同志社人のファイトでつっきれ」ということになります。私のような者が齢七十を数えてもとにかくファイトをもやしつづけることができるのは同志社にははっきりした使命があるという信念のようなものが私を支えてきたからであります。トインビー教授はアメリカがもし少数の富めるものや富める国のみを守るということだけをその国策とするならば、米国はもはや本当の意味での人間解放などとは何の関係もなくなる、という意味のことを述べていますが、これはなかなか考えさせる言葉だと思います。

私は一九六〇年十月米国アイダホ州の小さな町ボイシーのメソジ

スト教会の婦人会の招きに応じて「私の周囲の学生とキリストによる信仰」という題目で話をしたことがあります。私はその中で「米国は、キリスト教国としてキリストの十字架による人間解放を最も勇敢に実践することによってのみキリスト教国としての責任を全うすることができると訴えた時に、会堂に満ちていた会衆から強い共感をもって迎えられたことを今でもはっきり記憶しています。そしてこのことは偶然とはいえトインビー氏がその著書の中に述べていることとすこぶる似ているのであります。私をしてかく言わせたのは一にこれ同志社の私に対する教育の活きた影響の結果であると信じます。私の中学時代の波多野先生や加藤先生や飯塚先生等々の諸先生の人格的影響は私のような出来の悪い弟子をさえ奮起せしめたのであります。

同志社人はよく「良心を手腕に運用する」ということを言います。しかし「良心を手腕に運用する」ということを日常生活に実践するためには、それこそ積極的にして強じんなるファイトをつねにもやしていなければなりません。それもヒステリックにただ他を攻撃するだけでは良心の運用とはいえません。申すまでもなくこの世界において存在理由のはっきりしないものは、殊にそういう学校はその外形がいかに立派であっても新しく強くかつ美しいものを建設する原動力とはなり得ません。私は同志社人が大きな度量と深い清潔なる愛情と合理性を重じる精神と更にイエスの十字架によってシムボライズされている最も高い意味における正しさを守りぬく勇気を身につけていなければ、到底「良心を手腕に運用する」などといくら力んでみても結局空念仏に終ってしまうと思わざるを得ません。

ある日私は土曜日の講義を終って黒板に書きなぐった字を消そうとすると、一人の学生が「私が消します」といって私の代りに黒板をきれいにしてくれましたが、その時彼はいいました「なぜ同志社の人は自分の学校に誇りをもてないのでしょう。私はこの間、早稲田の友人に会いましたがとても自分の学校に誇りをもっていました。」こんなことを私はいろいろの人からきく。そしてそれをきく度に私にはグンとこたえるのであります。しかも私にこういうことを言ったのは在学生諸君だけではない、この数年間にわたって卒業していった随分多くの卒業生諸君が同じことをいっている。私は、今の時代には自分の学んでいる学校がどんな学校であろうとそんなことは問題ではない。もっと高い立場から行動することが要請されているのだと信じている人達が多いことも知っているし、またそういう方向へ行動しようとする意志も解らないことはない。

しかし、私は今こそ同志社がキリスト教主義の学校であることの真の意味をもっと明確に把握し、その立場から同志社はいかにあるべきかを深く鋭く考え、かくして得たる信念を静かにかつ強くその教育に生かさなければならないのではないかと思います。同志社に何人受洗者があったとか、信者の数が全学生の何割にすぎないとか、そんなことに私はすこしも関心がありませんが、同志社にどれだけ活きたキリスト的な生命、イエス的な生活態度が躍動しているかということは、その実現に同志社が全存在をかけてもなお余りある位のウエイトを持つ問題だと思えてなりません。

トインビー氏はその著書の中に、米国人が、ことに富める米国人達が物質的な文化生活にのみ生きがいを感じ、そういう方向にのみ

優越感をもち、それだけで満足しているとすれば、それは米国がかつては世界革命の指導的な役割を果していた光栄をかなぐり捨てるのだという意味合を持つ表現を用いて読者の注意を引いているのであります。そしてこれには深い含みがあると思います。

同志社は申すまでもなく日本におけるキリスト教主義の学校の中でも最も責任の重い第一人者であります。同志社がキリスト教主義教育に徹し、いかにこれを活かしているかということは、ある意味においてはますます復雑化していこうとする世界情勢と対決し、また他の角度から考えれば世界が一つになろうとする傾向が生れつつある現代において日本の果すべき役割に対して明確なる方向をあたえるだけの力があるものと信じます。

世間では同志社のような古い私学にはややともすると老化現象が起ると言われています。これは同志社にのみ言われることではなく、歴史の旧い私学にはよくあることだときます。しかし同志社が常に新しく強く前進する内在的な力をもつイエス的な行動の実践にその存在理由をかけるときに、そこに現われてくる同志社は常に潑剌たる気宇に満ち溢れる学園となり、根底のしっかりした進展の場となると信じます。何となればイエス的人生観の持ち主は「老いぼれる」ということを知らないからだと思います。

私は今になって漸くエマスンが面白くなり、うす暗くなった部屋でエマスンに読みふけり、家族にしかられるのでありますが、彼はポリチックスにおいて“Good men must not obey the laws too well”といいはなっています。彼は時に思いきったことをいいますがこの言葉なども なかなか味のある言葉だと存じます。この場合のGood menというのはイエス的な生活態度に本質的な共感をもち得る人達という意味に解釈したいのですが、そういう人こそが私どもの生活革新の原動力となるのだ―ということを私はここに引用しましたエマスンの言葉の中に読みとります。ことに最後の副詞句のtoo wellには、くめどもつきぬ味があると思います。

私はトインビー氏が米国に期待したようなことを同志社に求めようなどとは思っていません。それは同志社には同志社の行くべきはっきりした道があり、それはとりもなおさず同志社には同志社の使命があるということになります。真の同志社人こそいかなる場に在ってもその場の良心として活躍することができると考えます。これは言葉を変えていうなれば不断の努力をつづけることにって、また自分を高め、強め、深め、広めることを通して、その周囲をあらゆる意味において高め、強め、深め、広めることの原動力となることが同志社人の持つ誇るべき使命であると信じます。同志社を出た人人が各方面に働くときに力強いよりどころとなるような教育が、同志社においてなされることが最も必要ではないでしょうか。それにはキリスト的な人生観、イエスによることによってしっかり身につけることができる強靱であり、タフであり、ゴツ味のあるファイトを日々の生活に織り込むことを実践することがなによりも必要なことだと思います。

同志社が常にイエス的な生命が盛んに躍動する学園であり、人格形成の場として、また学問の場として絶えず前進する堂々たる真の同志社であるよう心から念願し、かつかくあらしめるよう努力いたしたいと存じます。

（校友・梅花女子短大教授・英文学）

新島襄
ロビンソン・クルーソー経済学

相[illegible]見　志郎

わが経済学部には「一般演習」という課目がある。これはいわゆる「演習」とはちがって、入学早々の一年生を対象とするもので、アドヴァイザー制度の発展した形態として、研究というよりはむしろ、新入生の人生相談に応ずる課目である。この課目は実のところ、私のような未成熟児には多少もてあまし気味のものではあるが、私はここでまず第一に、新島襄の“my younger Days”をテキストとして使用することをならわしとしている。このお蔭で私は、新島襄の若き日の姿について若干の知識をえたことに感謝している次第である。

この本を読んでいると、いろいろと興味をひかれるところが多い。武士道によって教育された人々が、はじめてキリスト教に接する場合、そこに激しい抵抗が見出されるのが通常のように思われるけれども、新島襄の場合には、こうした抵抗感なしに、スムーズに、いわば量的拡大としてキリスト教に入っているように感じられる。ロではなしにペテロのように。オランダ語の本の中に、創造主というポウう思想を見出して、これを自分の支柱としようとする新島襄。そうしたことはその頃の雰囲気においては、特異な例ではなかったろうか。これはどうしてなのであろうか。しかし、こうした問題について私の考えを述べてゆくのは、今の私の力を越えるところであるし、またここでの目的でもない。ここで取りあげたいのは、この本を読んで私が非常に興味を感じたもう一つの点である。新島襄は、友人から借用した本の中に、ロビンソン・クルーソー物語の日本語訳[1]を読んで、外国の地を訪れてみたいという野望を燃やしたといっている。私達が子供の時読んだ冒険物語、ロビンソン・クルーソー

を新島襄も読んでいて、boys be ambitious の念をその胸に植えつけていたのである。これでみると、ロビンソン・クルーソー物語りが、わが同志社の今日の存在に何らかの貢献をしていることが知られる。しかも、更に興味をひくことは、新島襄の祖父が、襄に向って、そのような本を読むことを禁じ、それは青少年を誤まらせるものであるとして、警告していることである。私はここに、日本版ロビソン・クルーソーを見出す。何故なら、この場面こそまさしく、ロビンソン・クルーソーその人が、彼の父親から訓誡を受ける情景をほうふつさせているからである。そこで私は、わが同志社の恩人ともいうべきロビソン・クルーソー物語そのものに、少しく光をあててみたいと思った次第である。

1) 野上豊一郎訳、岩波文庫『ロビソン・クルーソー』(一)の訳者の「はしがき」によると、わが国では安政四年(一八五七年)に出版された『魯敏遜漂流記略』が最初の邦訳であるとされている。

☆

冒険物語に対する少年の憧憬の心からではなく、経済学を学ぶものの立場からこのロビンソン・クルーソー物語に対する私の眼を開いてくれたのは、大塚久雄氏の「ロビンソン・クルーソーの人間類型」[1]という随想である。以下少しく大塚氏の筆を借りながらこの間の事情を語ってみよう。

1) これは、大塚久雄『近代化の人間的基礎』(白日書院、昭和二十三年)に収録されている。

正直なところ、ロビンソンの漂流生活は、私達日本人にリアルな感じでもって読まれているであろうか。どちらかといえばむしろ、他人ごとのような、本気では受けとれない架空な出来事のような、子供にでも読ませておけばよいというように考えられてはいないであろうか。つまり、ロビンソン物語は現実の生活とは全く縁もゆかりもない単なる奇譚として受けとられているのが常であり、もし私達の生活の雰囲気のうちに、ああした孤島の漂流記が構想されたとしたら、一体、ロビンソンのような積極的な生活の形成がテーマとなってくるであろうか。

そこで今一度、ロビンソン物語を、こうした問題意識を胸に秘めながら読み返してみよう。そうするとそこに、全く異なった情景が展開されてくるのを感じざるをえないのである。即ち、ロビンソン物語をよんでゆくと、難破してただ独り、孤島に打ちあげられたロビンソンが、極めて合理的に、計画的に、生活を形成してゆくのをみる。何よりもそこには、あの絶海の孤島での再生産過程の合理的な軌道が現実に作りあげられてゆく姿に気付くのである。

しかも、この再生産過程の合理的な軌道に今少しくレンズを接近させてゆくと、彼は一定の広さの土地を劃していわばこれを囲いこむ。これはその当時のイギリスで用いられた表現を使うと、エンクロウジュアを作っているのである。彼はまた大変勤勉であり、たえず勤労にいそしんでいる。そうして作りだした物資のなかで、自分の精神と身体との再生産に必要なものは十分にこれを消費するが、決して浪費はしない。この勤労と節約、それに加えて彼の生活ぶりには、極めて冷徹な合理性がある。ロビンソン物語は、野たれ死の漂流記ではなくて、力強い人の生活建設の記録であることが知られる。こうしてみてゆくと、孤島におけるロビンソンの生活は、他ならぬ当時のイギリスの生産力を担う中小生産者の生活そのものの表

現であることが露わになってくるわけである。

周知のように、このロビンソン・クルーソー物語りは Daniel Defoe (1661～1731) の作品である。ダニエル・デフォーは全く多作の人であり、作品総数二五四篇にもおよぶといわれている。こころみに、ブリティッシュ・ミュジアムのカタログをくってみると、殆んど手もつけられないほどの作品項目数に驚かされるであろう。このデフォーでたまたま思いだされるのは、もう十年も前になるか、経済学史学会の大会での、今は亡き上田辰之助氏の「西鶴とデフォー」と題する報告である。所は東西と異なりながら、殆んど時を同じくして、しかもあらゆる分野にわたっての多作の二人。経済学を学ぶものにとっては、デフォーは文学者としてよりも経済学者としての比重が重い。大塚氏もふれているように、ロビンソン物語は、経済的視点を離れては十分に評価できないかろうのではなか。ロビンソン物語の邦訳者野上豊一郎氏の、この物語りに対する解説は、勿論、「はしがき」という制約はあるにせよ、不十分なものといわれなければならない。何故なら、そこにはデフォーの経済的文献が殆んどあげられていないからであり、ロビンソンの孤島での生活も、超歴史的、超社会的な、一個の人間の物語りとして画きだされているからである。

だが、そうではない。ロビンソン物語りは当時のイギリスを離れては理解しがたいものであり、それと結びつけることによってこそ、その意義がはじめて確立されてくるものである。このことを最もよく表明するものは、ロビンソンの父親が彼に警告するその言葉の中に見出される。父親は放浪好きなロビンソンを戒めていう。父親の長い経験によれば、下流生活の上層ともいうべき中庸の状態こそ、世間で最上の状態であり、人間の幸福に最も適したものであって、社会の機械的方面の辛労災害にも、悲惨艱苦にもさらされることもなく、また社会の上層方面の高慢、贅沢、野心、嫉妬などでなやまされることのないものである。人生の惨禍は常に社会の上層と下層にふりかかっているものであり、中層階級は災厄が最も少なく、中層生活者は、あらゆる種類の徳行とあらゆる種類の娯楽にも適応している。平和と豊富とは中産の侍女である。節制、穏健、静粛、健康、社交、あらゆる気持よい気晴らし、あらゆる好ましい快楽は中層社会につきものの祝福である。この道を進んでこそ人々は、静かに穏やかに世を渡ってゆくのである、と。

デフォーがロビンソンの父親の口を通して語る言葉は、大塚氏によれば、近代の巨大生産の構築の主体的推進力となったあの「資本主義の精神」ということになる。それは、アメリカ合衆国の建設に力のあったフランクリンの『自叙伝』にも見られるが、フランクリンの画きだしている人間像であり、また、市民社会といわれる近代社会の倫理的生活をその全体性において構築しているものと考えられるアダム・スミスの『道徳情操論』の構想に、全く一致しているものと考えられるべきである。ノヴァクによれば、ロビンソンは苦難にあうごとに、常に父親のいう生活に留まらないで旅にでたことを、自分の原罪と考えているのである。[1)]

1) Maximillian E. Novak, Economics and the Fictions of Daniel Defoe, 1962.

☆

いわゆる近代経済学者達の著作には、よくこのロビンソン・クルーソーなる人物が現われてくる。ロビンソンは限界効用理論を展開するに恰好の場なのである。そこではこのロビンソンは、超歴史的、超社会的な人間として示されている。たとえば、カール・メンガーの『国民経済学原理』をあげることができよう。しかし、さきにもふれたように、ロビンソンの生活をそのような視角からみることは決して正しい把握ではないのである。ただこの場合いえることは、人間がその社会的環境から切り離されて孤島に移し植えられても、恰もその人間が超歴史的、超社会的な個として現われてくるような社会関係こそ、実に、科学としての経済学が誕生してくる場であるということである。つまり、この個は決して抽象的な個ではなく、人間がひとまず個として現われてくるような社会――それは具体的には市民社会――における個なのである。こうした構造をもつ市民社会において、経済学ははじめて誕生するのであり、その包括的表現はスミスの『国富論』において示されるのであるが、その道を準備する大きな布石として、デフォーの諸著作の意義があるわけである。

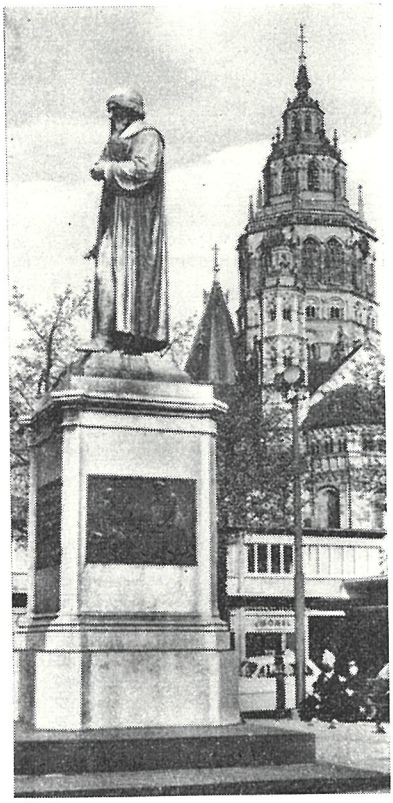
☆

私は昨年ロンドンに遊んだ際、ブリティッシュ・ミュジアムとロンドン大学の中央図書館内にあるゴールド・スミス・ライブラリのなかのデフォーの著作のカタログをみることができた。私の年来の研究課題は「イギリス重商主義の経済理論研究」であり、目下そのうちでデフォーの“mercator”とその反対者チャールズ・キングの“British Merchant”との綜合的研究をめざしている。幸いにもゴールド・スミス・ライブラリを利用してデフォーの文献を多数マイクロフィルムにとることができた。何かしらこのデフォーという興味ある人物にみせられてゆくようであるが、ボツボツと楽しみながらこのマイクロを写真版にとっては整本している次第である。デフォーの研究がこれからの私の主たる仕事となってゆくような胸さわぎがして、学校から支給される個人研究費を、せっせとデフォー文献の写真版に注ぎこんでいる。丁度、恋人にプレゼントするように。時には誰か好意ある寄附者が突然目の前に現われて、このマイクロを一挙に写真版にしてくれる資金を提供してくれるだろうと夢みたりしている。シャルル・フーリェは彼のいだく理想社会ファランヂュを実地に建設するため、篤志の財産家が現われて必要な資金を提供してくれることを確信して、晩年毎日正午には自宅に帰って待っていたと伝えられている。悲しいかな私はそれほど夢想家ではないけれども。

今もって私が残念に思うのは、かってエヂンバラを楽しんだとき、スミスのカーコルディに心を奪われて、そのすぐ近くにあるデフォーの生誕地、美しいといわれるラルゴーの町を訪れなかったことである。幸いにも大阪府大の友人内田勝敏氏から、このラルゴーにあるロビンソン・クルーソーの像の写真を借用できたので、ここにそれを利用させてもらって、せめてもの恋情をなぐさめておこう。

（経済学部教授・経済学史）

マインツ大学の学生たち



川島秀一

マインツ大学

雨に風も加わって冬のぶりかえしを思わせる寒い横浜を出港したのが昨年三月十七日。フランス船カンボジ号の客となって香港をふりだしに、サイゴン、シンガポール、コロンボ、ボンベイ、ジブチと寄る港々で、幸い船中で知己となった人々の歓待をうけ、白雪をいただくシシリーの山々を遠望してマルセイユに上陸したのが丁度一ヵ月後の四月十六日。友人の忠告も聞かずに沢山の荷物を携えてきたことをストラスブールの乗りかえに際して半ば後悔したりして、翌十七日正午、漸く目指すマインツに着いた。はるけくも来つるものかな、という距離感はこの前世紀的な船旅のせいでもあろうが、その歴史、文化の全く異質的な実体にわずかなりともふれえた現在の私の実感でもある。

私の学んでいるマインツ大学は正式には、近代印刷術の発明者の名を記念して Johannes Gutenberg-Universität といい、その歴史はチュービンゲンとともに古い、というのが当大学総長の言であるが、実はナポレオ

ンによって閉鎖され、第二次大戦後漸く再興された大学であり、近代のドイツ哲学興隆時にその名を見ないのは当然である。学生数約八千、ドイツ国内では中位の大きさであって、新、旧教の両神学部、法経、哲学、医学、自然科学の六学部といくつかのインスティトゥートがあり、とくに全学部が同一ゲレンデ内にあることはこの新大学の特徴であり、ドイツの大学としては珍らしいことである。夏学期は五月から七月末、冬学期は十一月から二月末までであり、夏学期に、私はお世話になっているリンテレン教授のドイツ観念論の講義、ゼミを始めとして併せて週二十時間余り出席した。講義は四十五分授業であるから、日本で往々見られるような横道や雑談などしている暇はなく、極めて精力的に行なわれる。特に注目したいのは、一人の教授が講義、ゼミそしてプロゼミナール（冬学期にはミッテルゼミナールとなる）を担当し、それが一貫して同一課題(例えば、ドイツ観念論)を対象としていること、講義で概論的に述べられたことがプロゼミでは対話形式で解説され、ゼミでは主としてドクトラントの連中を中心としてその特殊研究が行なわれ、結局、すべてが教授自身の研究に求心的に結びついている、ということである。周知のように、ドイツの大学はすべて国立であり、アビトゥアをおえた学生はどの大学、専門、教授、講義をえらぶも可。従って何々大学出という特定の意味はなく、実力さえあれば二年位で彼らの人生の方向を決定する種々の国家試験を受けることもできるし、サボッて何年頑張るも可。原則的には極めて自由にできているので、学生の側では、それだけ自分のために勉強しているという意識がたいへんはっきりしている。私の専門の哲学の傾向についていえば、この大学ではリンテレン教授を始め、このほど日本を訪れたフンケ教授、私が特に好感をもっている穏やかだが論理の飛躍を許さないシュタルマッハ教授、そしてホルツァマー、ディーマーの両教授等、すべて現象学ないし実質的価値倫理学の系統に属しており、もとよりハイデッガー、ヤスパースはここでも決して無視されてはいないにしても、極めて批判的に扱われているのが現状である。いかにして形式主義的実存論を超えて、内容ある学としての哲学を確立することができるか、という問題は、たんにここの哲学者のみならず、ドイツ哲学に課せられた課題でもあろう。

マインツァーコレークの学生

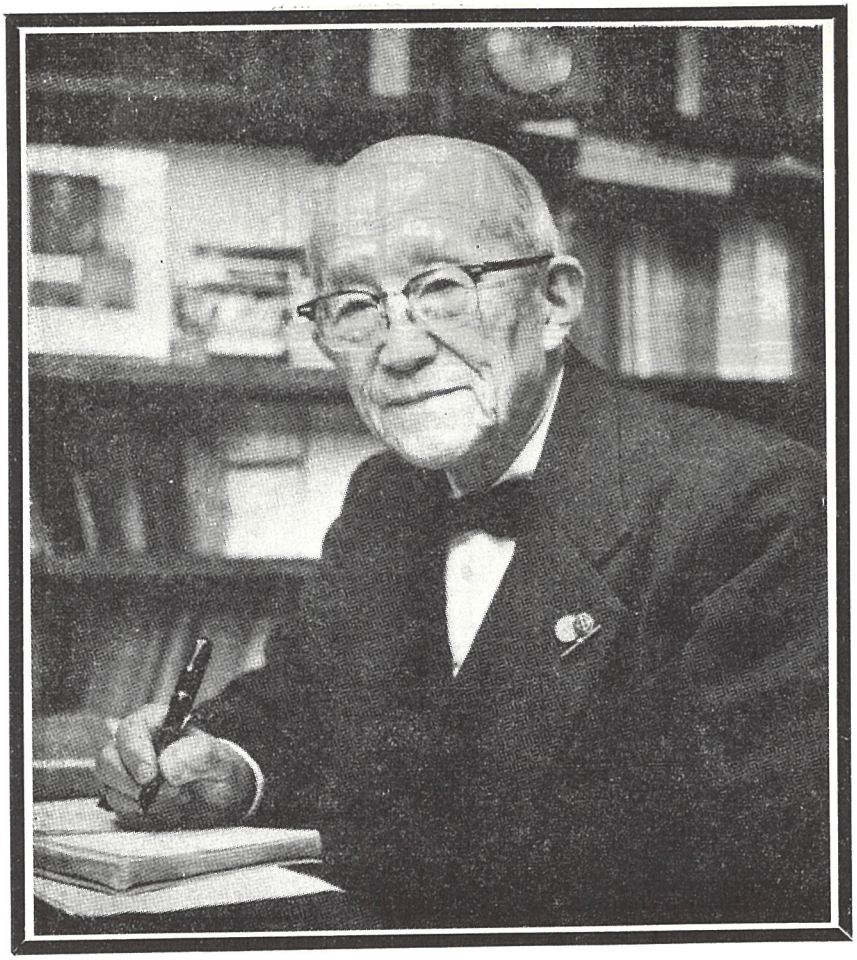
私はこの大学の構内の奥まった学生寮の一室で、個室を断わり、神学一年生のユンク君と起居をともにしている。この大学には、文学部の松本、岡両先生が学ばれたが、その岡先生がおられたマインツァーコレークの同じ棟に、私もまた偶然住むこととなった。ユンク君は一年生とはいえ、ギリシャ、ラテン、ヘブライ語をよくし、私にとって格好のドイツ語教師である。私はといえば、ドイツ哲学を学び独書講読を担当していたとはいえ、ここはドイツ。まして哲学の専門書にかじりついていたのみの一日本人にとってドイツ語が問題であるのは、当然である。一冊の哲学書をユンク君が朗読し、私が聞いて要約、解説し、それを彼が訂正する。あるときは、隣室の哲学生をまじえて夜を徹して諸問題を論じ、或るときは、広い芝生のゲレンデで陽光に甲羅をほしながら雑談する。このドイツ語との格闘は、ドイツにおける私の生活闘争で

あり、全く異質的な世界を理解しようとする闘いであった。これによって私は多くのものを学び、また多くの友をえたし、これを介してユンク君などは東洋伝道を生涯の夢とするに至ったことも附記しておきたい。この寮はチュービンゲンのライプニッツコレークを範として建てられ、学生の広い基礎的教養、豊かな人間性と結びついた専門的学問の追求を可能にすることを眼目としており、寮生は独得な寮意識をもっている。三階建、二棟（百四十名）からなり毎週七、八つの研究会が自発的に行なわれ、その中、舎監のザーメ博士の研究会は同時に大学の全学生が無料で参加できる一般教養の授業であって、案内の活動が同時に大学に寄与する形をとっていることは異色といってよい。一棟をライプニッツハウス、私の住む棟をゲシュビスターショルハウス（反ナチ運動に加担して死んだ若きScholl兄妹を記念したもの）といい、各階東と西のそれぞれの一群が単位（十二人前後）となって、また種々の行事を行ない、毎月それぞれの専門の教授をよんで懇談会などを開いたりする。設備は、全寮のクルプハウス、各一群にクルプ室、台所、電気冷蔵庫から洗濯機、暖房設備、それにもちろんビール類一式揃っている。学期の始めや終りに大タンツフェストがあり、こんなときは別格で、あのドイツ人の体力にまかせて明け方近くまでドンチャカ、ドンチャカやっており、そのときは、カリソメにも妻子ある身は遠く京都を思い、たまたま相手にあぶれた連中をつかまえて、もうもうと煙草をくゆらしツムボールをかさねて、高遠なる哲学を語るのみである。

ヨーロッパ遊学

この夏学期に近くのフランクフルトその他はもちろんのこと、さらにこの大学の客員教授として夏学期に来られていた京大の稲垣先生の車に、同じ客員教授として滞在中の松平先生とともに便乗して、酒で名高いモーゼル沿いに西行してトリアー、ルクセンブルクを訪ねたり、またリーメンシュナイダーに魅せられてヴュルツブルク、ローテンブルク近在を二度たんねんに訪ね歩いたりもした。やがて夏休みを迎え、学生達は国家試験の準備などに余念ない者、工場などにアルバイトに行く者を除いて、故郷に或いはヨーロッパの各地に遊学に旅立って行く。私も八月末にみこしをあげ、スイス・ミッションの後援で行なわれた日韓在欧学生会議に招かれてゲンフに四日間、チューリッヒで同志社にも関係の深いコーラー教授の宅に三日間ご厄介になった。その後ミュンヘン、ザルツブルク、ヴィーンをまわり、そこの国際夏期講座に出席するかたわら、すっかりこの美しい古都に魅せられ寧日なく歩きまわって二十日間、さらにニュールンベルクの知人を訪ねたり、その近くで開かれたアーベントレンディッシェアカデミーにリンテレン教授とともに招かれて一週間、二百人近くのドイツ人文系の学者達と親しく交わる機会を得たり、またキールの或る教授に招かれて十日間、そこの教会のゲマリンデで講演を頼まれたり、その間シュリースビッヒ、リューベックさらにコペンハーゲンにまで足をのばして北欧の風光に接したり、キールからの帰途ハンブルク、ケルン、ボンを訪ねたりした。こうして私としてはかなり精力的に多くのものを見、聞き、学び、知己を得て、まあまあ分相応に Ich werde auch das Kind schon chaukeln. などと自らを慰めている次第である。

（文学部講師・西洋倫理学史）



牧野　虎次先生　B.D., LL.D. PH.D., D.D.

一八七一年七月三日　典医牧野安良・ひさ子の二男として滋賀県蒲生郡西大路に出生。

一八八七年　同志社在学中、金森通倫牧師より受洗。

一八九二年　同志社英学校卒業、各地に伝道。

一八九九年　沢村繁意と結婚。

一九〇二年　イェール大学神学校卒業。

一九〇三年　京都四条教会牧師、翌一九〇四年、宮川経輝牧師より按手礼を受く。内務省嘱託、満鉄役員、家庭学校長（東京）を歴任。

一九三八年　同志社総長事務取扱並びに大学長。

一九四一年七月――一九四七年三月　同志社総長。

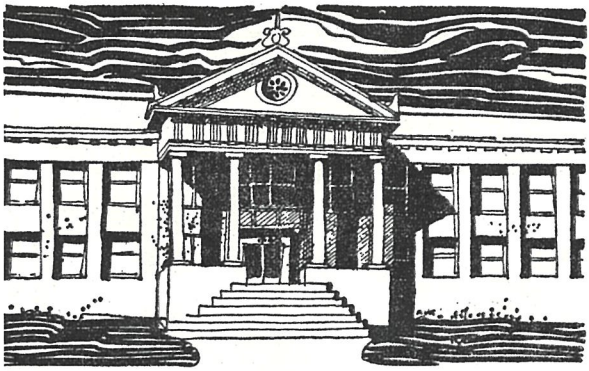
京都府教育委員、京都社会福祉協議会会長等を歴任。

一九四九年　藍綬褒章を受く。

一九五四年十一月　京都名誉市民に推薦さる。

一九六四年二月一日　永眠　享年九十二歳。

一九六四年二月十七日　京都市葬（於同志社栄光館）



命　　名

—ベーランドに想うこと—

末　光　力　作

「新らしい工学部の建物の名称ですが、神学館が建ったため取り壊された徳照館の名を嗣いではという話もありますが、徳照館では工学部には少しもったいなすぎる様うに思うし、何か工学部にふさわしい名はありませんか」工学部教授会での星名部長の話である。確かにその通りで工学部の建物としてはテクニックを表現し、延びゆく姿を象徴するような良い名前はないものだろうか。私達の学園の中には日頃何げなく呼びなれているが、ふと考えてみると仲々良い名だと思われる建物がいくつかある。例えば彰栄館である。あの時計台のある建物は、北の札幌の街に今なお響いている札幌農学校演武場の時計台と共にいつまでも残しておきたいものである。その鐘の音は明治の良き時代には静寂な京都の市街に鳴り響いたといわれ「彰栄の鐘の音」といえばいかにも良い響をもって校友一人一人の心に母校の精神を語っているであろうし、良い思い出に連なっているようである。またハリス理化学館もその端的な表現がかえって面白い。明治二十三年の竣工といえば当時は確かにわが国の科学の代表的殿堂であったに相違なく、昔の写真には屋上に天文台のドー

ムさえ見られ、その偉容を天下に誇っていたものであろう。その名も理化学館と銘打ってわが国の科学振興を意図した初代の人々の志が偲ばれるのである。

私が関係している化学や生物の領域では仲々味わい深い物質名、実験器具の名称、植物名等がある。即ちそれらの名称にはその背後に一つ一つそれ相当の歴史があって、命名者の意志や感動が込められている場合がある。命名者達の業績や命名にまつろう苦心談や逸話などを調べることは結構面白いことである。こんなことがひいてはその物質や器具あるいは植物などに対する親しみを増したり、物質の特性を理解する上にも甚だ助けとなるものである。そればかりかいつしか学問自身にも興味を覚えるようになるものである。私たちの学生時代を顧みても、大切なことは大部分試験と共に忘れ去ってしまうことが多いが、先生の口から漏れたちょっとした先人の逸話や余談に類する話などは仲々忘れるものではなく、結構頭に残っているものである。私は常日頃よい漫談の出来る教師になりたいと思っているのである。さて頭に浮ぶまに少し紹介してみよう。

まづ元素の名であるが神話に出て来る神様の名前をとったり、天体や人名を記念したもの、地名や国名を記念したもの等々があって一々記していてはとても大変であるが、中にはその名前を見ただけで色や外観を推定出来るものである。例えば塩素 Chlorine は chloros 黄緑色から、臭素 Bromine は烈しい臭気を有するため「悪臭」bromos から、沃素 Iodine は蒸気の色の「紫色」を意味する ioedes などいづれもギリシャ語から来た名称である。また種々の着色した塩を作るクロム Chromium は「色」chromos から、イリヂウム Iridium は同様にその塩が色々な色を出すため「虹」を意味するギリシャ語の iris から来ている。更にルビヂウム Rb、セシウム Cs はそれぞれラテン語の「赤」rubidus「青」caesius から来ていて、何れも実験室で使うブンゼン燈で有名なブンゼンが考え出したスペクトル分析法によって発見された元素である。今まで知られている元素には見られない青色や赤色の美しいスペクトルを分光器でとらえたとき、ブンゼンの感懐はいかばかりであったろうか。私達はルビヂウムとセシウムの名前ににじみ出ているブンゼンの新元素発見の感動を察知することが出来る。

真島利行博士はわが国の有機化学の草分けで、世界に誇り得る幾多の業績を残しておられるが、中でも有名なのが「生漆の研究」である。漆は東洋の特産物であり、日本の漆器は古来有名であるが、生漆からあの黒先りした樹脂が出来たり、皮膚に対していわゆるウルシかぶれをおこさせる原因となる本体を究明しょうとして、博士は漆と取組まれ、遂にアルコール成分を分離してその名も「ウルシオール」と命名され、構造を決定されたのである。この研究には研究室員全員が漆にかぶれながら悪戦苦斗したそうで博士の苦労がしのばれるのである。

真島先生と並んで日本の有機化学を育てて下さった方に朝比奈泰彦博士がある。博士は数多くの漢薬成分の構造決定をされた方であるが、かつて関東大震災のとき東大構内のソメイヨシノザクラがほとんど倒されているのを見て、一つさくらの樹皮の研究をしょうと志され、それからフラボン系の黄色々素を分

離、その名も可愛らしい「サクラネチン」と命名してその構造を決定しておられる。その他真島門下の女流化学者黒田博士はわが国に古くから伝わる植物染料のムラサキグサの根から色素を分離、紫根に因んで「シコニン」と命名されているが、これなどはいかにも女性にふさわしい業績と名前であると思う。同じく真島門下の小竹博士は効能あらたかなガマの油を研究して、日本産のガマから強烈な強心作用を持った「ガマブフオタリン」を単離、いづれも構造をきめておられる。四六のガマを四面鏡の部屋に入れて油をしぼったかどうかはしらないが、その業績をみるとかなりの労作で懦夫をして襟を正さしめるものがある。その他村橋博士は松茸の香を研究して「マッタケオール」、野村博士はショウガの辛味成分を究明して「ショーガオール」、赤井博士は漢薬ウラジロイカリ草と取組んで「イカリチン」、小松博士は柿の渋味成分から「シブオール」とあげていけばきりがないくらいである。このように日本特有の天然品から分離された物質で一見してその出所がわかる面白い名のついている物質はかなり多く、その一つ一つが研究者の輝かしい業績を物語っているのである。

個人的な話になって甚だ恐縮だが、私にも化合物の命名に関して自分なりの懐しい思い出がある。学校を卒業して間もない頃、私は恩師より牛の尿の研究をするよう申しわたされた。さすがの私も小便は少々苦手である。何か他のテーマにして下さいとお願いすると、「いや尿は仲々面白いよ。これまで数多くの新化合物が尿から発見されたし、牛尿と牛糞の混合物である堆肥は素晴しく植物の生長に効くのだよ。一つ是非やってみ給え」とのことである。なるほど考えてみればノーベル賞に輝くブテナント博士の性ホルモンの研究も、ケーゲル博士の植物ホルモンの研究も材料はといえば人尿からではないか。それなら一つ私も敗けずにやってみようと大いにハッスルして、それから毎日牛尿の採集が好まった。一粁も離れた農場へ毎日自転車で出かけて行って二〇リットルの尿を運んで来るのだが、まだポリエチレンの容器などないときで勿論ガラスの容器である。それがでこぼこ道の悲しさ、途中で触れ合って運悪く破損すると、たちまち黄金水の洗礼を腰から下に受けることも一、二度ではなかった。このように苦心して集めた貴重な尿から私は一つの無色結晶物を単離することに成功した。文献を調べてみてもそれらしき物に見当らない。しめた新物質だ！という訳で便宜上名前を付けることにしたが、尿 urine から取ったアルコールという意味でウリノール Urinol と命名しその構造研究に取りかかったのである。ところがある日文献と調べてみるとどもウリノールの理化学的性質とよく似た物がある。よく調べてみると私よりも十数年も前にマリアンという人が馬の尿から性ホルモンをとるとき同時に分離して、その名も馬の学名 Equus caballus に因んでエクオール Equol と命名して構造も決定しているのである。研究の上でも馬はやはり牛より速かったでは駄じゃれにもならない。情ないやら残念やらで、私はその一瞬地球が一時停止してしまったような感じを持ったものである。しかしこんなことをしている中にいつしか化学に興味を持ようになったのであって、思えば懐かしい思い出である。

さて植物の方でも仲々面白いものがある。

幕末に来た有名なドイツ人の医師シーボルトは日本の植物に非常な興味を持ったらしく、帰国のときには茶の種などを持って帰ったりしている。彼は日本産のアジサイに心をひかれその学名に長崎の恋人お滝と自分の名をつけて甘いところをみせている。曰く、ヒドランジア、オプロイデス、オタクサ、シーボルジイ！

またコロンブスの新大陸発見以来、土人達が喫っていたタバコがヨーロッパに移されたが、フランスに始めてタバコを紹介した人、Jean Nicot 名を記念してタバコ族の植物はすべて Nicotiana という属の中に入れられている。こうなって来ると人の名前も夢おろそかにつけられず、学名に用いてもはずかしくないゴロの良い名をつけておかねばなるまい。先年工学部の女子学生で相当勇ましい武勇伝を残したオタンチン嬢がいたが、ある口の悪い人がオタンコナス・ドーシャエンス……（…は命名者の名前）という学名を奉った。オタンコナス君も今や立派な奥さんになっている由である。

今世紀のはじめアメリカに Bakeland というベルギー系のアメリカ人化学者がいた。彼は仲々のやり手で、大学を卒業したのち、かなりの競争に打勝って教授の美しいお嬢さんを射とめて妻にむかえたまでは良かったが、薄給の研究者のつらさ、仲々奥さんを満足させることが出来なかった。そこで何か金儲けはないかと考える中に、写真の印画紙に目をつけてヴェロナスという新しい印画紙を発明して、イーストマン・コダック社に売りつけた。これが大あたりして、三十五才ぐらいのときにはひとかどの財産家となっていたという。このようにして財産を作った彼はそれからは後顧の憂なく自由に研究に専念出来た訳である。彼はこれからは電気の時代だから当然すぐれた電気絶縁体が必要である。何かよい製品を発明したいと考え、苦心の結果石炭酸とホルマリンから立派な電気絶縁体の合成樹脂を作り出し一九一〇年工業化することに成功した。これが有名なベークライト Bakelite であって商品名に自分の名前を付した彼の得意さは充分察するに余りがある。このように科学者の中には、発明品に自分の名前をつけるかなり厚かましい人もいるが、ベークランドはベークライトを発明して大いに世界に貢献したのだから、やはり少々威張るだけのことはあるわけである。

私学の授業料の問題が学園の内外に喧しく大きな社会問題となって来ている。私達関係者も何とか良い解決策はないものかと関心を持たざるを得ない問題であるが、学費の値上げも最高限度に来ているし、国庫補助の問題もそううまく解決出来るものとも考えられない。私は常日頃考えているのであるが、私達工学部に禄を食む者達はこの際虚心ベークランドにならって、どんどん良い発明を出して少しでも学校の経営をお助けしなければならないのではないか。いや大きなことはいはなくても学園に迷惑をかけなくてもすむくらいにはしたいものである。ただ単に官立大学の研究の在り方を模倣したり、羨望することはやめて、工学部に連なる研究者が一致団結して無い智恵は補い合い。小さな殻に閉籠もることなく、お互の研究の便宜を計り合って同じ目的に進むならば、この夢も単なる夢に終らないような気がしてならない。今後の私学経営の在り方として、先づ同志社が天下に範をたれるようになったら、それこそ素晴しいのだがと、こんな柄にもない大きな夢を見ている次第である。

（工学部教授・化学）